

【日時】 令和4年3月7日（月） 10時～12時

【場所】 文京総合福祉センター 地域活動室A

【出席者】 高山 直樹 (自立支援協議会 会長) オンライン参加

志村 健一 (自立支援協議会 副会長) オンライン参加

竹間 誠次 (知的障害) オンライン参加

河野 孝志 (身体障害)

畑中 貴史 (区委員) オンライン参加

【事務局】 美濃口、關、林、太田 (文京区障害者基幹相談支援センター)

【欠席者】 小西 慶一 (身体障害)

福田 美沙子 (身体障害)

永野 栄一郎 (知的障害)

【補助人】 松下 功一 (竹間委員とオンライン参加)

【開会前に事務局からの連絡】

- ・ コロナが収束しないため、オンラインとのハイブリッド開催で実施
- ・ 会議録作成のため、会議内容の録音についての確認
- ・ 配布資料は次第のみと確認

1. 開会の挨拶 障害福祉課課長より

コロナの影響が長くなり障害福祉課でも様々な事業を中止、延期していて、今後もしばらく続くと想定される。皆様のご意見を頂戴しながら、どういった事業をどういった形で出来るか引き続き考えていきたい。

2. 議題

(1) 令和3年度 第2回障害当事者部会・権利擁護専門部会合同開催の振り返り

事務局：第2回は、当事者部会、権利擁護部会、民生委員合わせて40名近く参加し、当日の感想や

アンケートでは、「竹間さんが自分で決めていいと気づかれたのがすごい」「支援者が竹間さんのペースに合わせて一緒に歩んできたところが信頼関係を築けて良かったのでは」「竹間さんの生の声を聞いて良かった」など好意的な内容が多くありました。その後、権利擁護専門部会でもう一度振り返りをして竹間委員の話 を深めました。

・権利擁護専門部会では場面ごとにシートにして、誰に相談をして、相談した人はなんと言っ、竹間さんはどういう風に思っ、行動に移したのかを場面場面で確認し、そこに意思決定の支援があつたことを確認した。お母さんに相談をした際に仕事を「辞めていいよ」と言ってくれた。これは家族だから言えたことと皆の反応があつた。親の立場でなかなか言えないが、それを言える強さ。そんな確認をしました。

[参加した委員の感想]

- ・発表をして疲れた。反応を聞いて嬉しかった。ドキドキした。またやってみたい。
- ・他の部会でどんな活動をしているのか知りたかつた。権利擁護専門部会の活動を聞いて、当事者部会の活動の共有が出来て良かった。民生委員にとっては初めての機会となつて発見があつたと思う。テーマ別に深めていけると思う。もっと知りたい。当日の雰囲気も良かったと思う。
- ・民生委員の傍聴が多かつたのが印象に残っている。中止になっている交流会のきっかけになる。
- ・とても大切な話でたくさんのお話を学ぶことが出来た。竹間委員のように継続的に長く関わるのはすごく大事なこと。他の施設の人にも広がっていくパイオニアになつた。

・神奈川県には知的障害の当事者部会がたくさんあつて、政策に繋がる活動をしていて、とても大切。自立支援協議会の部会は就労、相談、権利擁護、バラバラになっている。竹間さんの話は就労、相談、家族、全部が一つに繋がっている。全体のことを民生委員は理解できたと思う。それが障害理解に繋がる。ドキドキワクワクする場所、体験、関係性が地域にない。そういう体験や居場所が地域にあり、その中に相談する場所があるのがいい。そういう場所を作っていく文京区であつてほしい。シンポジウムで生活のしづらさの話をして、その中に差別があつた。当事者が生活のしづらさを発信することで差別、バリアに気づく、バリアフリーのチャンスになると思う。例えば、聴覚障害の人にとってのマスクは口話を阻害し、脊椎損傷の人にとっては3センチの段差が困難であり、視覚障害の人にとっては段差がないと知らないうちに車道に出してしまう。普段の生活のことを発信していくことが大事。竹間さんが発表してくれたことで色々な気づきを与えてくれた。他にドキドキするようなことはありますか？

[当事者委員より]

- ・話していることが伝わっているかと思うとドキドキする。他に、ゲームセンターでコインが増えたり減ったりする時にドキドキする。
- ・シンポジウムに出た時に道路の段差は2センチを保つてもらわないと危険と話した。ドキドキだ

と不安が先にあり、怖さのドキドキが多い。一人で歩く初めての場所と出会い。不安なドキドキと嬉しいようなドキドキが混ざっている。最近声を掛けてくれる人が増えていると感じる。理解ということで言うと、盲学校時代は知的障害と重複する人がいて接する機会があったが、他の障害の人をあまり知らない。民生委員との交流もぜひしたい。半生を語るのは問題ない。話したいことがたくさんある。テーマ別に、歩行（安全面）、読み書き代筆、職業、盲学校での勉強等色々考えられる。

休憩後、前回傍聴で参加された方より感想をもらう。

・私の障害は発達障害で、前回の合同開催は区報で見つけた。自分で自分をどう扱っていいかわからなくて、そのヒントが見つければと傍聴参加して勉強になった。管理する側が障害を分けているが、重複することや別の障害の人の道具が使いやすいこともある。自分は発達障害も当てはまるが、認知症、高次脳機能障害、精神疾患の特徴にも当てはまる。耳の機能的には問題ないが、脳の機能の障害で聞いている内容が理解できないというのものもある。障害を縦割りで支援するのは良いが、同じテーマで色々な障害がある人、健常者、支援者、様々な立場の人が同じテーブルで特徴や不便に感じていることを発言するのがいいと思う。

(2) 令和4年度の活動方針について

事務局：現在自立支援協議会そのものの運営について話し合っている段階である。来年度やりたいことについて率直なご意見をいただきたい。

・コロナが流行っているので集まれるかわからない。当事者委員が二人しかいない。民生児童委員との交流や河野委員の体験談、体験談の合同部会発表。自分の話をするのも楽しいけど、人の話を聞くと自分もそういうことがあったなと思って楽しい。

・民生委員との交流会は是非やって欲しい。少人数ではあるけれど、それぞれの障害についてテーマを出して話してもいい。12月のふれあいの集いで竹間委員に会って作品を触らせてもらった。声を掛けてもらって嬉しかった。部会内での意見の出し合いも良いのではないかな。

・声を掛けてもらう経験を肯定的に受け止めている。交流会等の活動を通して、声を掛ける文化、繋がりがある文京区で広がる出発点になるのが当事者部会であって欲しい。視覚障害で声を掛けないで欲しい時はありますか？

→個人的にはないと思うが、道を歩いている時に声を掛けると恐らく半分以上は「大丈夫です、いいです」と答えると思う。でも、その時は「お気を付けて」でいい。声を掛ける側は、断られることにも慣れてください。いずれは頼まれますから。前は困った時は白杖を振れと言われていた。最近目は目の高さに上げるだけでいいと言われるが、私はしたことがない。靴の音がしたら直接「すみません」と声を掛けている。

・集まることも大事だが、もっと自由でいいのではないかな。横浜市神奈川区ではバリアを見つけ出す

という活動をした。地区ごとに民生委員と一緒に歩いて、地域をチェックしていく。それが発信、理解していくことに繋がると思う。学生を絡めてもいいと思う。

・当事者部会には、来年度以降各部会と親会のはしご役をお願いしたいと考えている。当事者委員のいない部会もある。他の部会や親会の活動や話し合っていることの情報を得る機会にもなるし、自立支援協議会全体のパイプ役になることも期待している。傍聴の方で発達障害当事者の方が参加されていると聞いた。色々な障害とも重なる障害だと知った。皆気づいていないだけで意外と多い。学んだことを発信していただく場としての当事者部会を活用して欲しい。発信することが生きづらさの理解に繋がり、学びの場としての部会になるのではないかと。文京区の街づくりの大きなヒントとなると思う。

事務局：地域生活拠点を4地区で整備していて、富坂拠点から街づくりのワーキンググループに当事者委員の力を借りられないか提案されている。ワーキンググループの中に学生や民生委員らと街づくりについて考える流れになっているように感じた。多くのヒントを頂けた。

・前回の合同部会のように他の部会とも合同でやりたい。

事務局：アンケートで就労支援部会とやってもいいのではという意見もあった。

・通常他部会に参加するのもいいと思う。合理的な配慮をする。合同でやるのもありだと思う。様子も分かるし、大事なことだと思う。

・集まって話をする以外の参画の仕方があってもいいと思う。

・アイスブレイクで「自分作り」という、得意なこと、好きなことを発表するのも面白いと思う。

・ワークショップ形式もありだと思う。社協もやっている。国立市の当事者部会はバリアフリーと美味しいものというテーマでドルチェワーキングというのをやっていた。

事務局：自由に考えていいという意見を頂けた。事務局で持ち帰って親会との連動を含め、次年度の回数や開催内容について検討したい。

3. その他連絡事項

事務局：今年度で委員を退任される委員より皆様へ伝言を頂きました。「役を引き受けたのに役に立てず申し訳ないです。こんなに体調が悪くなると思っていなかったです。皆さまへよろしくお伝えください。」